

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

古典を読む(第1回) 佚斎樗山著 『猫之妙術(ねこのみょうじゅつ)』 : イチロー的無我について

藤沢, 周 / FUJISAWA, Shu

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

74

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

209

(終了ページ / End Page)

219

(発行年 / Year)

2006-12-25

【古典を読む（第一回）】

佚齋樗山著『猫之妙術（ねこのみょうじゅつ）』

——イチロー的無我について

藤 沢 周

シアトル・マリナーズのイチロー外野手が、今年（2006）も200安打達成である。メジャー史上3人目の6年連続、さらにはゴールドグラブ賞も受賞となった。

むろん、2004年10月1日、ジョージ・シスラーの持つ年間最多安打記録を、84年ぶりに更新した262安打という奇蹟的な成績も忘れるわけにはいかない。我々はここで「天は二物も三物も与えるもの」と、イチローの天才ぶりに素直に得心するのが精一杯か。いや、それでも舞台裏の特練を探り、彼が試合前になると誰よりも早くグラウンドに入り、入念にダッシュやストレッチを繰り返すことや、自宅にある合計数千万円の筋トレマシンで鍛えているから、ということを知り、少しは腑に落とすのであろうか。

だが、6年連続の200安打も、262安打の最高記録も、そのようなことだけで達成されると納得するわけにはいかない。むしろ、彼がある時にさりげなく漏らしたシンプルな言葉が引っ掛かってくる。そこにこそ、鍵があると見た方がいいのではないかと。バッターボックスに入る前に彼が注意することについてである。ただ一点。

「いかに力を抜くか。それしか考えていない」

最近はいやに愛想の良くなったイチローだが、この言葉を呟いた時は憎らしいほどクールな表情で、「おまえらに言っても分かんねえよ」とでもいったげに取材陣を目の端で牽制していた。

——いかに力を抜くか。

この種の言葉はスポーツならずとも、様々な世界で耳にするものだが、その言葉への想いの強度とレベルが、我々とはかなり違うと見た方がいい。力を抜くとはどういうことか。

もう一人、同じ世界で、野球の神様に最も愛された男といわれる長嶋茂雄の言をあげよう。現役時代に「どのようにしたら、ヒットやホームランを打てるのですか？」という質問を受け、長嶋は、「うーん、見て、打つ。見て、打つ」とバッティングの所作をまじえながら、あまりにも明朗な答を返したのである。

——見て、打つ。見て、打つ。

力を抜く、といい、見る、といい、この当たり前な言葉に、じつは彼らの成績の秘密が隠されているのではないか。記録へのプレッシャーやファンの期待に応えるストレス、何処にボールを転がすか、チームの勝利をいかに誘導するか、デッドボールへの反応、牽制球への対処、投球の速度と種類……そのヒット／アウトに関わるあらゆる可能性を孕んだ一瞬のうちに、いかに力を抜いて、ボールを見、打ち、グラウンドの地平線の隅々まで自分のものにするか、が、彼らの言葉の中にはあるのだ。

彼らの言葉の省略を補えば——いかに球種を見分けヒットを打つか、あるいは、ヒットを打とう打とう、という気合からくる雑念を払い、しかもそのノイズを払うということ自体も意識していたら打撃の邪魔になるから、出来る限り、自分自身を脱落させてボールそのものを見たい。その見ようとする事すら、様々な思念に塗れて視覚を濁らすので、さらに見るということさえも忘れ、その瞬間瞬間のボールになりきることが肝要なのです、ということに近いだろうか。

たとえば、「悟るとは、観ることなり」と断じたのは、禅の研究者として知られ、欧米にも多大な影響を与えた仏教学者・鈴木大拙（1870～1966）だが、「観る」ということが本当に出来たら、それは悟りであると示した言葉だ。「観る、などごく日常的なことではないか。それが何故、悟りなわ

け？ 私、テレビ、見るしー。俺、ボール見て、打つしー」という声が聞こえるが、果たして、それは本当に見／観ているのだろうか。長嶋の「見て」と同じものだろうか。

見る。観察する。凝視する。眺める。傍観する。睨む。見つめる。見惚れる……「見る」に関するバリエーションは際限なくありそうだ。また、人の数だけ見方があるだろう。この時、「見る／観る」と自覚しているのは誰か。もちろん、自分である。「今、俺は赤信号を見たので、止まる」「私は彼氏が笑ったのを見てホッとした」など、見ているのは「私」である。当然の話。だが、イチローがバッテリーボックスでボールを見ている時は、「私はボールを見ている」と思っているだろうか。あの160キロ近い速球を「今、僕はボールを見ている。あ、ちょっとシンカーっぽいけど、ストライクゾーン掠める程度かな。いけるね。これでまたヒットだね」などと見ているのだろうか。

「経験するというのは事実其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹というのは、普通に経験といっている者もその実は何らかの思想を交えているから毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態をいうのである。たとえば、色を見、音を聞く刹那、未だこれが外物の作用であるとか、我がこれを感じているとかというような考のないのみならず、この色、この音は何であるという判断すら加わらない前をいうのである。それで純粹経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している。これが経験の最醇なる者である」

このパラグラフはイチローの手記から、のわけもないが、イチローがもし思弁的な言説によって打撃について語るとしたら、これに近いものになるのではないと思われる。あるいは、長嶋の「う～ん、いわゆる、ひとつの……見て、打つ」のフレーズにもこれが省略されているのかも知れな

い。禅の宗教性や生について日本の深層に横たわる「無」の哲学について初めて言語化した哲学者・西田幾多郎（1870～1945）の著書『善の研究』から「純粹經驗」について書かれた文章だ。物を見る、物を知覚するとは、何か。真に世界を捉えるとはどういうことか、を巡って、日本が古くより携えてきた独自の思想を体系化した思想家である。

つまり、イチローや長嶋からすれば、「打撃というのは、投げられたボールそのままを、そして、そのものを捕らえるということだ。自分が今まで身につけてきたテクニックや筋肉や運動神経やセンスなどをむしろ棄てて、ボールそのものを見て、あらゆる可能性を瞬時に知ることが基本であり、最高度のものなのだ。普通に理想的な打撃といわれているものでも、実は何かしらのテクや駆け引きや予測などを交えている。そうではなくて、一切の考えも技術も加えない、真に打撃そのもの、ボールそのものの状態になることが大事なのである。たとえば、ボールがきた、外角から入ってきた、僕はそれを捕らえる、ではなくて、カーブでもフォークでも、あるいはショートが少し動いたでもなく、ボールそのものになり、打撃そのものになるために、判断を加えようとする自分自身をなくしたい。そのために、力を抜いて、意識している自分自体を脱落させたい」となるのかも知れない。

イチローや長嶋の言葉に通底する大拙や西田の思想は、前述したように東洋禅の考え方がバックボーンとしてあるのだが、その「無」の思想といい、あるいは、「身心脱落」といい、「無我」といい、いかに認識する時の自我というフィルターを消し去り対象そのものとなるかが、基本の思想（宗教）である。自我をなくして、宇宙と一体化する全能感と静謐。「見る」ということは、むしろ「私」をなくして対象になりきることで、対象と同化することが重要となるのである。

ここでさらに、「見る」ということを突き詰めた世界に入ろう。野球もちろん「見る」ことに対して命懸けで行われるスポーツであるが、「見る」ことが、まさに命に関わる世界が古来日本にはある。

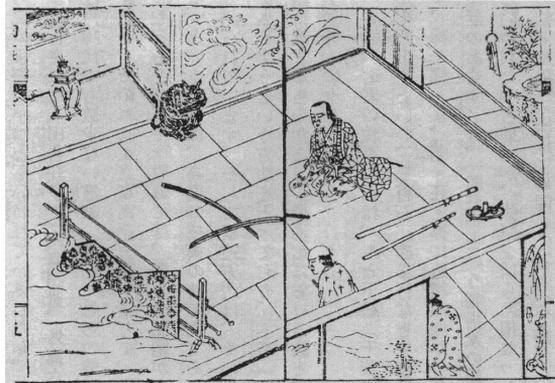
武道，である。

対峙する相手の動きや気配を見，察して，素早く対処しなければ，斬られる。死へと直結する。剣の世界は，頭にデッドボールを受けるよりも端的に命にかかわり(当然だが)，だからこそ「見る」ことや「自己」のあり方についての様々な考察が試行され，古典としても残っているのだ。

江戸初期の二刀流の剣豪・宮本武蔵『五輪書』はもちろん，柳生新陰流の基本的伝書『兵法家伝書』，沢庵和尚の『不動智神妙録』，唯心一刀流の根本伝書『一刀斎先生剣法書』，『天狗藝術論』，『兵法未知志留辺』『免兵法之記』などなど枚挙に遑（いとま）がないが，ここでは，『猫之妙術（ねこのみょうじゅつ）』なる武道伝書を取り上げてみよう。

タイトルからして怪しげではある。が，戦いの基本，「見る」基本，対峙する基本，ストリート・ファイトの基本（？）等，武道の真髓が込められた古典である。イチロー，長嶋ならずとも，世界把握を試みる者ならば垂涎の一書。あの幕末・明治の政治家であり，無刀流の創始者である山岡鉄舟が愛読し秘蔵したといわれる，伏斎栲山（いっさいちょざん）の著書である。

もともとは江戸時代の老荘思想に関する啓蒙書『田舎荘子』（1727）からの一章なのだが，猫の言葉から剣の極意を悟らせるという風変わりな物語として栲山がアレンジしたものだ。



伏斎栲山著『猫之妙術』より

勝軒という剣豪の屋敷で起こった鼠退治騒動を設定に話は進められるのだが，とにかく現れた鼠というのがとんでもなく怪物めいた奴で手に負え

ない。まず「技」に長じた黒猫が挑むが、まったく駄目。次に「気」を練り続けた虎猫も頑張ったけれど、駄目。ならばと、「心」の修養を長年こなしてきた灰猫が鼠の相手になるが、やはり駄目なのである。ところが、暇さえあれば寝ているような古猫がいとも簡単に鼠を捕らえてしまった。この一部始終を眺めていた勝軒が、その古猫師匠に極意を聞くというユニークなプロットである。

まず、騒動の後に、業師である黒猫は負け惜しみでこう自慢を垂れる。

「我れ鼠をとるの家に生まれ、其道に心がけ、七尺の屏風を飛び越、ちいさき穴をくぐり、猫子の時より、早わざ、軽わざ至らずと云所なし」

だが、鼠の攻撃に遭い、対応できなかったのは事実。それに対し、古猫は細い目をして答えるわけだ。

「ああ、汝の修する所は、所作のみ……（略）……所作を専として、兎すれば角すると、色々の事をこしらへ……はては所作くらべ、……道にもとづかず、只巧を専らとする時は、偽りの端となり、向（さき）の才覚却而（かえって）害に成る事おほし」

つまり、テクニック第一主義に走り、自分の技や運動神経に溺れ、表層しか見えていない視野の狭さを批判しているわけである。七尺の屏風を越えるジャンプ力や穴をくぐる敏捷性などアスリート級なわけだが、それだけじゃまったくものにならないと古猫はおっしゃっているわけだ。

そこで、「武術は気然を貴ぶ。故に気を練る事久し」と、気合なら誰にも負けぬと虎猫が登場して一説ぶつ。

「今、其気闊達至剛（かったつしごう）にして、天地に充るがごとし。敵を脚下に踏み、先ず勝て然して後進む。声に随い、響に応じて……変に応

せずといふことなし。……桁梁を走る鼠は、にらみおとして、是をとる」

でも、鼠、逃げたし、まったく触りもできなかったし。

古猫曰く。

「汝の修練する所は、是れ気の勢に乗じて働くもの也。我に恃（たの）むこと有て然り。……我やぶって往んとすれば、敵も亦やぶって来る。……豈我のみ剛にして、敵みな弱ならんや。闊達至剛にして、天地にみつるがごとく覚ゆるものは、皆気象（かたち）なり。……氣勢に屈せざるもの、ある時はいかん。窮鼠却って猫を噛むといふことあり。彼は、必死に迫て恃む所なし。生を忘れ、欲を忘れ、勝負を必とせず。身を全するの心なし。……此の如き者は、豈氣勢を以て服すべけんや」

虎猫の修練した「気」は単に勢いだけだ。ハッキリに近いではないか。無理に敵を破ろうとすれば、敵も同じく反撃してくる。天地に充るがごときだと？ それも表層。相手を倒そうとする力のみの、ガチガチの「気」であって柔軟なものではない。窮鼠猫を噛むという諺があるように、向こうも必死。さらには生死をも忘れ、向かってくるのだから、氣勢のみ、力のみでは屈しない。古猫はアクビの一つでもしながら、こう論したのである。

ならばと登場したのが、「技」も「気」も修め済み、要は「心」の問題である、と達人風に現れたのが、灰猫だ。黒猫、虎猫よりも、かなり格上という風情。「気は旺（さかん）なりといへども、象（かたち）あり。象あるものは微（かすか）也といへども見つべし。我れ心を練ること久し」と、なかなかの言である。

「勢をなさず、物と争わず、相和して戻さず。彼つよむ時は、和して彼に添う。我が術は帳幕（いばく）を以て、礫を受けるがごとし。強鼠有といへ

ども、我に敵せんとしてよるべき所なし」

「技」も「気」も超越すれば、もはや「和」のみ。相手に添うことによって、己のものとする「心」が大事。頑強な礫が投げられれば、私は大きな幕で柔らかく包み込むようにして対処する。こうすれば、どんな化け鼠であろうと、己に対して敵対しようという気持すら失せるから、簡単に捕らえられるのです。

だが、簡単に捕らえられなかった。相和そうとする気持ちにも乗ってこない。どういうことか。

「汝の和といふものは、自然の和にあらず。思つて和をなすもの也。……敵の鋭気をはづれむとすれども、わづかに念にわたれば、敵其機を知る。……思ひてなす時は、自然の感をふさぐ。……只思ふこともなく、することもなく、感に随つて動く時は、我れに象なし。象なき時は、天下我に敵すべきものなし」

この境地である。「和」が「和」として現れている間は、「和」ではない。「和」を考えること自体が、雑念となって自らを邪魔するし、相手にも悟られる。思っているうちは駄目だ。何も思わず、何もせず、むしろ自己を捨て、相手や対象と合一する時こそ、無敵の状態となる。西田幾多郎の言葉を借りれば、主客合一となった時こそ、すべてを超越し、純粹経験として世界をものにできるということになるだろう。

むろん、古猫は、「技」「気」「心」の修練は必須であり、その後に「無我」となり、「自然」と合一するところまで高めていかなければならないと説いている。そして、自分でさえかなわなかった凄腕の猫が隣村にいたと話す。

「むかし我隣郷に猫あり。終日眠り居て、氣勢なし。木にて作りたる猫の

ごとし。人其鼠をとりたるを見ず。然共、彼猫の至る所、近辺に鼠なし。所をかへても然り。我往て其故を問。彼猫答えず。答にはあらず。答る所を知らざる也。是を以知りぬ。知るものは言わず。いふものは、しらざることを。彼の猫は、をのれを忘れ物を忘れ、無物に帰す。……我また彼に、及ばざる事遠し」

とにかくやはり寝てばかりの猫なのだが、その周りにはいつも鼠がない。何故、と問うたのだが、その猫は答えない。いや、答えないのではなく、答えられないのだ。自己を完全に脱落させて、自然と合一化しているために、自己自体さえ認識の対象にならない。だから、答えられない。

この次元までいけば、真に達人といえるのだと古猫は最終的に説いたわけだ。『猫之妙術』は、そのまま西田幾多郎の純粹経験ともいえるし、またイチローの「力を抜く」、長嶋の「見て、打つ」という言の発せられた位相と通底するものだろう。だが、この「無我」や「自然との合一」は、江戸時代の武道伝書以前から、つまりは、その根底にある禅の思想が日本に入ってきた頃から数多くの古典に実は多く表わされているのだ。

たとえば、すべての芸術論に通じる室町初期の能役者・世阿弥が著した『風姿花伝』が然り。能の修行や演出などに関する能楽理論書だが、年来稽古条々、物真似条々、問答条々、神儀、奥義、花修、別紙口伝の七編からなるものだ。「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」というフレーズは有名だが、花伝書にはこんな文章もある。

「物数を極めて、工夫を尽して後、花の失せぬところを知るべし」

様々な工夫や修練をこなし、極めることによって、世界の蔽いが取れ、「花」の真景が現れるという意であろう。『猫之妙術』の「技」「気」「心」を徹底的に極め、その後、実相をつかめということとイコールである。

この世阿弥のフレーズに関し、たとえば創造的批評の確立者・小林秀雄

(1902～83) はこう述べている。

「僕は、無要な諸観念の跳梁しないさういふ時代（室町時代）に、世阿弥が美といふものをどういふ風に考へたかを思ひ、其処に何んの疑はしいものがない事を確かめた。『物数を極めて、工夫を尽して後、花の失せぬところを知るべし。』美しい『花』がある、『花』の美しさといふ様なものはない」（「当麻」1942）

観念的な「花の美しさ」ではなく、直接的に経験される「美しい花」があるのだ、と。そして、「観念上の自我を排して、心を虚しくして実在や自然を受け入れるべき」とも書いた小林は、「文学と自分」（1940）という講演で、こんなこともいっていた。

「作品とは芸術家が心を虚しくして自然を受け納れるその受け納れ方の極印であると言ふ事が出来る。だから、若し芸術家に己れをいふ様なものがあるとすれば、この極印のなかにしかないと申すのであります」

ここで「作品」を「打撃」や「武道」に、「芸術家」を「プレーヤー」や「剣術家」に置換するのは、不自然であろうか。イチローならずとも、おそらく広義の意味で「世界」を獲得する者にとって、最も難題であるのが「己」そのものなのである。「己」を、「自己」を、どうやって消滅させ、世界の真景を手に入れるか。

剣を持つ者であれば、誰もが知っている「四病」なる言葉があるが、驚、懼、疑、惑、つまり、何かといちいち驚き、むやみに恐れ、あることないこと疑い、ついにはどうやっていいのか迷う、という病。これらは自己におけるノイズの基本中の基本。イチローも長嶋も宮本武蔵も、こんな地平でまごついてはいない。さらに、物の見方として、自分を形作ってきた様々なもの（性差？ 教育？ 肩書き？ 大学？ 彼女いるいない？ 貯金

額？ 出身地？ ……），さらに突き詰めれば、「言葉」という認識のツールさえ、真に「見る」ということに対し、フレーミングしたり、曇らせたりして邪魔することを熟知しているのだ。

——いかに力を抜くか。それしか考えていない。

イチローはおそらく肉体的なレベルだけで、この発言をしたわけではないだろう。むしろ、認識、意識のあり方自体が硬直するのを避けようとしている。もちろん、その避けようという思念自体も。

今回は『猫之妙術』なる、まさに妙なる古典をメインにあげたが、我々が携えている日本の古典には、人間の深層が持つ計り知れぬ可能性や、言語による果敢な冒険で既存の言語体系を超克しようとした叡智が詰まっている。

イチローの愛読書が武道古典だったら、あまりに出来すぎだが、昔日の書物には、世界の実相を探るためのヒントがふんだんに盛り込まれているのだ。